

## 武蔵野日曜集会

## 復活の主

## ――ヨハネ伝20章1～31節――

1968年8月4日

小池辰雄

一週のはじめの日「マリヤよ」「ラボニ」キリストの復活の本質 永遠の生命者 十字架の贖罪のキリスト 福音第一 キリストの中で 平安なんじらに在れ 驚嘆すべき霊体的存在 本當の批判精神 信じて見よ 新しき生命を生きている 子どもよ獲物ありしか 我を愛するか アガパオーとフィレオー 一人称二人称の關係 キリストと我の關係は贖罪 汝知りたもう 活殺自在 伝道と殉道 パウロやヨハネはわが親友 信愛一如

## 【ヨハネ20】

1 一週のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。2 乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』3 ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。4 二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、5 屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。6 シモン・ペテロ後来り、墓に入りて布の置きたるを視、7 また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。8 先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。9 彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟らざりしなり。10 遂に二人の弟子おのが家にかえれり。

11 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて、墓の内を見るに、12 イエスの屍体の置かれし処に白き衣をきたる二人の御使、首の方にひとり足の方にひとり坐しいたり。13 而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』14 かく言いて後に振反れば、イエスの立ち居給うを見る、然れどイエスたるを知らず。15 イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守ならんと思いて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』16 イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ振反りて『ラボニ』（釈けば師よ）と言う。17 イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」といえ』18 マグダラのマリヤ往き



て弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々の事を言い給いしと告げたり。

19 この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』<sup>20</sup> 斯く言いてその手と脅<sup>わき</sup>とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。<sup>21</sup> イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣わし給えるごとく、我も亦なんじらを遣わす』<sup>22</sup> 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊をうけよ』<sup>23</sup> 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめらるべし』

24 イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、<sup>25</sup> 他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅<sup>わき</sup>に差入るるにあらずば信ぜじ』

26 八日のち弟子等<sup>たち</sup>また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じおきしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』<sup>27</sup> またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ』<sup>28</sup> トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』<sup>29</sup> イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福なり』

30 この書に録<sup>ふみ</sup>さざる外<sup>ほか</sup>の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。<sup>31</sup> されどこれらの事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

## ●一週のはじめの日

19 章 31 節からは詳しいことが書いてあります。ヨハネ伝の記事というのは案外、史実に即していると、この頃の研究ではむしろ、ヨハネ伝の十字架、復活のあたりは非常に歴史的に順序が正しいのではないかと言われているくらいです。他の三つの福音書と比較研究というようなことを今、日曜のこういう集会でしようというわけではありません。まあそういうのはそういうので一つのテーマとして研究会でも開いてやればよろしいので。

アリマタヤのヨセフが来て、キリストの屍を引きとって行つたというようなことが書いてありますが、そこらはお読みになった通りで結構です。今日は結局、20 章の復活のところに来てしまうわけですが。

## 1 一週のはじめの日

即ち、十字架にかかつて次の次の日です。



朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。

マグダラのマリヤが一番先に現れてきて、それからその次に、

<sup>2</sup>乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子

即ちヨハネです。一番先にマグダラのマリヤにキリストが現れ、それからペテロに現れ、それから、エマオ途上の二人の弟子に現れ、キリストの兄弟のヤコブに現れ、というような順が大体、ヨハネ伝の順がいいのではないかと。それから、多くの婦人たちに現れ、また使徒たちに現れ、それからガリラヤに行つて、また使徒たちに現れ、またガリラヤで子どもに現れ、最後に橄欖山で使徒たちに現れて、昇天するといったような順序に考えられているようです。まあそういうことはここでのこののと言うわけではありません。とにかく読んでいきます。

<sup>1</sup>一週のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。<sup>2</sup>乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』

「我ら」というのは女の人たちのことです。

<sup>3</sup>ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。<sup>4</sup>二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、

即ち、ヨハネの方が早く行つてしまった。よく名画にもそんなのが出てますね。

<sup>5</sup>屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。<sup>6</sup>シモン・ペテロ後来り、ペテロの方が少し年とつているとみえてね、

墓に入りて布の置きたるを視、<sup>7</sup>また首を包みし手拭は布とともに在らず、

なかなか詳しく書いてある。

他のところに巻きてあるを見る。

別の所に巻いてある。

<sup>8</sup>先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。

マリヤの言ったことをです。

彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟らざりしなり。

「べき」というのは非常に強いので、必ず甦えんということ、そういうことを聖書に録してあるのに、それをまだ悟らなかった。

●「マリヤよ」「ラボニ」

<sup>10</sup>遂に二人の弟子おのが家にかえり。



11 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、  
どうも諦めがつかないものですから、このマグダラのマリヤの方は。  
泣きつつ屈みて、墓の内を見るに、<sup>12</sup> イエスの屍体<sup>しかばね</sup>の置かれし処に白き衣を  
きたる二人の御使、

このことは他の福音書にも出てますが。

首<sup>くび</sup>の方にひとり足の方にひとり坐しいたり。<sup>13</sup> 而してマリヤに言う『おんな  
よ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主を取去れり、何処に置きしか我  
しらず』<sup>14</sup> かく言いて後に振反<sup>ふりかえ</sup>れば、

誰がやったんだろうと思って、後を振りかえったんですね。

イエスの立ち居給うを見る、然れどイエスたるを知らず。

けれども、それはイエスであることがわからないから、

<sup>15</sup> イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守<sup>そのもり</sup>なら  
んと思いて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、  
われ引取るべし』

レンブラントの絵があります、こういうのも。私は今度、ヨハネ伝をドイツ語で全部テキ  
ストにして教科書を編みつつあって、レンブラントのこの絵を出すんですが。

<sup>16</sup> イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ振反りて『ラボニ』(釈けば師よ)と  
言う。<sup>17</sup> イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。

我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神  
に昇る」といえ』<sup>18</sup> マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』  
と告げ、また云々<sup>しかじか</sup>の事を言い給いしと告げたり。

非常に劇的ところです。マタイ伝28章をみると、

「<sup>8</sup> 女たち懼<sup>おそ</sup>と大なる歡喜<sup>よろこび</sup>とをもて、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんと  
て走りゆく。<sup>9</sup> 視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』と言い給いたれば、進  
みゆき、御足を抱きて拝す。<sup>10</sup> ここにイエス言いたもう『懼るな、往きて我  
が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼處<sup>かしこ</sup>にて我を見るべきことを知らせよ』」(マ  
タイ28・8～10)

この時は、マリヤが——これは多分マリヤでしょう——キリストの足にしがみついてしま  
つたらしい。ヨハネ伝では、「触れるな」というわけですが。

それで、この「天使」というのが必要な時に現れてくる。これはキリストの降誕の時も  
そうですし、それから預言者の中にもいろいろありました。また、非常に靈的な幻を見る方々  
は天使を見たりする。仏教の方でも、「天女」というのがある。とにかく、靈的なそういう  
使いの存在が見えてくる。これは事実で、錯覚でも何でもなし。聖書にちゃんとあるん  
です。だから仕方がない。また、我々のあいだでも経験した人がある。





それで、まあ天使はいいですが、「<sup>そのもり</sup>園守」かと思つたところが、これは園守ではなくて、事実、イエスがそこに現れた。

「マリヤよ」

と言われた。この声は確かにはつきりとかつて聞いたことのある声だものですから、そこでマリヤはすぐに振りかえつて、

「先生！」

と言つた。この「振りかえりて」というのは、ただちよつと後を見たということではなくて、本当に向き返つてという意味です。向き直つてしまつて、そして真つ正面に見た。驚いてしまつてね。それはそうですよ、「マリヤよ！」と言われたから、ただいい加減な振り向き方くらいなものではない。まともに見て、そしてキリストにしがみつこうとしたわけでしょう。だから、

「<sup>ふ</sup>触れるな」

と言われた。

### ●キリストの復活の本質

この復活のことですが、いろいろこの記事に、詳しく調べると矛盾してみたり、いろいろありますが。それは昔の非常に古いそれぞれの言い伝えによつて書かれたものですから、むしろ食い違いのあるのが自然なわけで、全部が合つていたらむしろ返つておかしいくらいなものです。事実、この復活という事実はどう考えても、これはあつた。あつたけれども、しかし、では復活というのは一体何だろうか。そこに非常に大きな問題があるわけです。

これが実は、信仰の別れ道といつていいかと、あるいは、次元的な完全な相違となるといつていいかと思うんです。大体、今の神学者や牧師さんたちは復活についてはいろいろ論じたり、言つたり、聖書に基づいて申します。けれども、復活についていくらそれが語られていようとも、その人が本当に復活を受けとつているかということとは別問題です。

キリストの復活は、死んだ者がただ息を吹き返したという、ラザロの復活とはちよつと違う。ちよつとどころではない。ラザロは甦えつたけれども、また死にました。けれども、キリストは甦えつてまた死なないんです。ラザロの甦えりとは、甦えりの質が違う。キリストはラザロを甦えらせましたけれども、それはキリストの霊の世界のひとつの事態を、ラザロの甦えりという現象をもつてそこに徴として顕されたのであつて、ラザロの甦えりそのものが何か非常に重大なことではない。

もろもろのいろんな宗教だつて、病を癒したり、いろいろします。不思議な話はそこらここらにたくさんある。けれども、この福音においてキリストの甦えりということはそういういわゆる不思議ということとは違う。その意味においては、この記事を読んで、こうだからといって、この相対的な復活の記事から結論をだして、



「だからキリストは甦えった。おしまい」

なんて、いくらそんな結論を出したって、それはキリストの復活の本当の把握にはなっていない。そういう論の仕方はひとつも本当の本質に触れていないと私は思う。

本質に触れていることは、実は我々が、

「キリスト・イエスという人の全存在からして、彼が死なないところの生命を持っている。たとえ復活という現象がなくても、キリストは死なない、生きているんだ」

と、これがはつきり言えなくては。これが、

「見ずして信じる者はさいわいなり」

ということ。このことはヨハネ伝の今の終わりの方に出てくる。トマスが疑い深いやつだから、

<sup>25</sup>他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の

痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅<sup>わき</sup>に差入るるにあらずば

信ぜじ』

と言った。たとえそういうようなキリストがそこに現れたとしても、そのキリストは死ぬかもしれないよ、すぐ復活しても。

「ああ、釘の跡があった。これで甦えった。確かだ」

と。それが本当の信仰だろうか。それがキリストの復活の本当の証明だろうか。私はむしろそう言いたいくらいです。

キリストは見えなくなってしまった。一体、復活したんだろうか、どうしたんだろうか。誰か死骸を取って行ってしまったんだろうかと。もし、聖書に復活の記事が非常にあいまいな記事であっても、相対的な復活の記事そのものがあいまいであるか、正確であるか、というようなことによつて、そういうことによつて、キリストの復活というものが実証されたか、されなかったか、信じられるか、信じられないかと、そういうことではないということを言おうとしている。もしそうならば、それは不思議な現象を信じているだけの話です。

### ●永遠の生命者

この罪なき、神の意志を完全に行じたところの、この実存が滅びるものではない。これが滅びることは非常な不合理である。復活の記事いかにかわらず、キリストは滅びないひとである、永遠者であると。そこを本当に受けとっている人は、本当の十字架の贖罪を受けとる人であり、本当にキリストの永遠の生命として甦えりのことを受けとる人であると私は思う。私の信仰はそうです。

だから、十字架の贖罪なきところには、どんなに素晴らしい復活の記事があっても、その甦えりは、私は信じない。それは甦えったでしょう。けれども、死ぬかもしれない。し



かし、

「十字架の贖いをするだけの實力のあつたキリスト。これは復活の記事がどんなに不完全であろうと、必ず甦える永遠の生命者である」

ということが言えなければ、それは信仰ではない。それは福音的信仰ではないと私は思う。いわゆる不思議な宗教の信仰は知らんよ、そんなものは。そんなものはどうだっていい。我々の福音の信仰というのはそう。それを、キリスト教の神学者や牧師さんが、

「さあ、記事はどうだ、ああだ、こうだ。果してそんなことがあつたんだか。まあ書いてあるから信じましょう」

なんていうのは信仰か、そんなものが。ところが、そういうのが多いんですよ。

これはキリストは甦えらざるを得ない。永遠の生命としてあらざるをえない。その永遠の生命としての一つの現象が、この四十日間現れた。それが百日現れなかったから不確かだというのでも何でもない。いや、四十日が十日であつたつて、三日であつたつていいよ、現れ方が何日だつて。四十日が問題でも何でもない。

だから、見ないで受けとる者はさいわいなりと。

「**見ずして信ずる者は幸福なり**」

とキリスト自身が言っている。

29 イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は

幸福なり』

と。私が復活したか、復活しなかったか、私に会ったか、会わなかったか。そんなことを見ないで、私が永遠に生きている者である、甦えつて生きている者であることが受けとれないか。受けとれないか、受けとれるか、どつちかなんだと。本当の信仰か、信仰でないかというのはどつちかなんだ。観念的に思いこむことでもなければ、現象でもつて実証するものでもない。それをもう何のかんのといろんなことを言つては、

「神さまがあるにしては世の中は不合理すぎる」

だとか、何とかかんとか言つて、神さまの品定めをやっているわけだ。もの凄い図太いものです、この信仰というのは。

とにかく、この私というやつを根底から贖い救いとして、そして、

「さあ、この生命をやるぞ」

と言つて、本当の生命を持ったキリストがいなかったら、私はもうキリスト教をやめますよ。ええ。いわゆる芸術でも、学問でも、事業でも、それに没頭した方がよっぽどいいわ。

## ●十字架の贖罪のキリスト

あなた方のいろいろなお仕事や勉強やがありますね。一体その原動力は何ですか。自分の生き甲斐の本当にあるところ、根底となりまた目的となるものは何ですか。このキリ



ストです。こないだやった、十字架の贖罪のキリスト。この永遠の生命、死んでも死なないところの——世界中がひっくり返って、原子爆弾、水素爆弾でもって世界がお終いとなっても——絶対にお終いとならない世界を持っているか。そのためには、このキリストがなかったら私はどうにもならないというのが私の信仰です。必ずそのキリストの神の国は来る。黙示録に約束されているところの国は来る。何となれば、私の中に、何がどうなっても、天国が、天国の中心体であるこの甦えりのキリストがある。

「われ汝のうちに。聖霊を受けよ！」

と言って、この甦えりのキリストが「息を吹きかけた」と書いてある。ヨハネ伝20章のもう少しあとのところに。

21 イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣わし給えるごとく、

我も亦なんじらを遣わす』<sup>22</sup> 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊を

うけよ』<sup>23</sup> 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその

罪とどめらるべし』

と。凄いことを言っている。

「聖霊の人はこれだけの、私と同じ権威を持つぞ」

と言う。我々はこう言われたって人に対して、ちょっとできませんよ、なかなか。けれども、それだけの権威を持つぞということなんです。これをうっかりやってはいけませんよ、我々人間がね。けれども、キリストはそこまで言われた。キリストの言葉はまあ実に危険千万な言葉です。この名刀をうっかり使ったらダメだ。

「己が審く審判にて審かれる」

と、逆にやられてしまう。名刀で傷付いてしまう。

本当の名刀というものは、これは抜かない。本当の名刀は鞘におさめたまんま、とうとう抜かずじまい。これが本当の無者なんだ。刀を抜かない侍が本当の侍。本当の人間のことを侍と言う。いざとなれば無手勝流。私は気合の男ですからね、理屈の男ではない。

キリストは、

「この聖霊を受けよ」

と言われた。この御霊を受けて、御霊の名刀が来てしまったから、

「よし、大いにそれを使おう」

と。どっこい、そう使つてはいかん。そこで剣の話になったんだが、たとえ剣をとつても、剣をとつて剣なきがごとし。無剣の剣というのがあるんだな。切らない。もうそれだけで相手が参ってしまう。それでおさめてしまう。やたらに切つてはいかんです、本当は。

## ●福音第一

そういうキリストを受けて、これが私が言う「福音第一」——もし主義というなら、福





音第一主義——私にもし主義があるなら、福音第一主義という。このキリストの福音。福音第一。皆さんは、いろいろな人生の問題にぶつかりますよ。やれ結婚問題だ、やれ就職問題だ、やれ入学問題だ、受験問題だとか、なんのかんのと。家庭の問題もあるし、いろんな問題がある。世界の問題もある。けれども、すべての問題に対して福音第一ということを外して考えたら、ダメですよ、敗北ですよ。どんなにその時にはよきような結果になっても、それはダメです。しかし、福音第一で行って、どんなにその時に気まずいことになろうが、負けたように見えようが、運命環境が苦しくなってもよいが、

「本当に自分は自分の生命は福音にある」

ということが本ものであるならば——これをただお題目に掲げたってダメですよ、無理に無理に掲げたってダメだ——本当にこれが自分に即して、

「わが生命は福音第一という他に生命はないんだ」

と。どんな患難も突破していきます。

「せん方尽くれども望みを失わず、倒さるれども止むびず」

とパウロが言ったのは、彼は福音第一で生きていたから。キリスト一切で生きていたから。その

「キリスト一切」

のキリストとは、今も生きて聖霊としてわがうちに来たりたもうところの復活の主。御霊の主として直ちにわがうちに来たり給うところの主。その主を第一としてすべてのことに対処する。

これに対しては一人の乙女といえども一步も譲らない。そうしたら、なにも剣をもって英軍を追い払ったジャンヌ・ダルクみたいにならなくなつて、あなた方自身が質的にはジャンヌ・ダルク以上です、そういう乙女は。その質的にジャンヌ・ダルク以上の乙女になつてくださいよ。キリスト第一で生きてください。そこをズラしてしまつて、ちよつとよきそうに見えたつて、それは必ずダメになつていく。何をやっていったつていいよ。私も学校の先生なんかしているけれども。この福音第一を私は抜かして、いい加減なことをやっているなら、私は先生として落第。私は福音第一でやっているんだ。それでわるかったら、いつでも学校を辞めると言っている、正直。そうしたらば、本当の落ち着きができてくる。それで貫いていく。

キリストが、このマグダラのマリヤは可哀相な女だから、これを本当に救つてやった。だから、もう彼女は全存在をもつてキリストに感謝しているわけだ。

「どうしたんだ、どこへ行つてしまったんだ、誰が持つていったんだ、私が引きと

ろう」

と。ところが、甦えりのキリストが、

「マリヤよ」



と。彼女はおったまげてしまった。けれどもやはり、このマリヤはちょっとまずかったですね。屍を引きとつて何になるんですか。そんなキリストではなかったはずだ。やつぱり、マグダラのマリヤは、これだけ救われながら、やはり聖霊の世界ではなかった。

これはどんなに救われても、キリストの聖霊が来るまでは、マグダラのマリヤであろうと、ヨハネであろうと、ペテロであろうと、パウロであろうと、みんなダメです、聖霊が来るまでは。聖霊が来てから、みんな変わっていく。福音書でたくさんの人がいろいろ、盲者が目が見えてみたり、跛者が立ってみたり、たくさんこのキリストに癒されたり救われたりしたさ。けれども、さてその中の何人が本当に聖霊を受けて、キリストを本当に生きる人になったか。それはわからんです。

まだマリヤは人間的にキリストを思っているものだから、キリストにしがみつこうとしたから、「どっこい」とキリストに言われた。

17 イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。』

「これから私は天界に行つて、それから今度は、お前の中に本当に入つてくるぞ。握手どころのさわぎではない。抱きつくどころのさわぎではない。お前の中に本当に入つてしまうぞ」

と。そういうことです。そうしたらば、マリヤは本当にキリストを生きることになる。

## ●キリストの中で

「に在りて」という言葉がたくさんある。「に在りて生きる」とか。いいよ、それは。「イン」。「エン・クリスト」「キリストにあつて」という。これは「キリストの中で」と、そのまま訳した方がいいわけだ。日本語にならないものだから、「キリストにあつて」と訳すけれども、私もそう訳すけれども、本当は「の中に」と訳したい。あまり普通の日本語にならないから、「にありて」と訳しましたけれども、どうも訳してもあまり響かないんだよ。時々、「の中で」と訳すし、あるいは「の中へ」という4格になるときもある。この「中」の世界、「イン」の世界です。

我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神

に昇る」といえ』

そこでマリヤは、「わが主を見たり」と言つて喜んでしまったんだけど、それはまあいいさ。復活のキリストを見て喜んだ。みんな彼らは復活のキリストにでつくわして、喜んで立ち上がったんだよね。けれども、まだその喜びは本ものではない。本ものの喜びは、何と言つても、使徒行伝のペンテコステから始まる。ここから、

「この喜びを奪う者なし」

とキリストが約束したその喜びは、この聖霊が入つてきてからの喜びです。あなた方の信仰も、聖霊が入つてきてからのこの喜びを、私の喜びを、誰も奪うわけにいかん。何と私



のことを悪口言おうが、どう言おうが、けなそうが、小池を一人にしようが、絶対にこの主にある喜びは、全世界の人もこの私の喜びを奪うことができない。それは聖霊だもの。私の信仰とかそんな小さなことを言っているではないんだから。

「キリストの復活」という、「復活」なんていう言葉はだいいちあまり気にくわない。息吹き返したような言葉は。始めっからキリストは生きていますよ、永遠に。

「キリストが十字架にかかった、お終いだ」

なんて思っ、とんでもない間違いだったんだ。一人くらい、

「そんなことはないぞ」

と言うような弟子が一人でもいたらよかったんだけど、一人もいないんだ、そんな弟子は。まず、誰も実はそうでないですね。パウロ自身もキリストに躓きまして、

「われは罪びとの首なり<sup>かしら</sup>」

と言った。もう人間はみんな落第。聖霊の手前では全部落第。それだけキリストの霊というものはつきりとした別な霊です。贖罪を経なければどうにもならんところの事態です。

### ●平安なんじらに在れ

だから、キリストが、もう甦えって十字架を経きましたから、キリストが、

「本当にお前たち、安かれ。平安、汝らにあれ」

と。19節から、

19 この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因り

て居るところの戸を閉じおきしに、

まあ情けないね、この弟子たちも。

イエスキタリ彼らの中に立ちて言いたもう

戸を閉じていたら入ってきたよ。戸を開けたのではないから。スツと入ってきた。スツと、それはもう霊の世界ですから。

『平安なんじらに在れ』<sup>20</sup> 斯く言いてその手と脅<sup>おそ</sup>とを見せたもう、弟子たち主

を見て喜び。21 イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、

まだ彼らの次元は低いから仕方がない。キリストがそれくらいのことをしないと分からないからね、彼らは。

父の我を遣わし給えるごとく、我も亦なんじらを遣わす』

私は手紙の表に時々、「平安」てなことを書く。それはキリストのこの言葉から来ている。

「どうぞ、あなたに平安があるように」

と。「シャーローム」という。「汝に」というのは、

「シャーローム レカー」（あなたに平安があるように）

と。「あなた方に」というのは、



「シャーローム ラーケーム」(あなた方に平安があるように)

という。いろいろありますが。ところが、ユダヤ人が「こんにちは」「さようなら」というのはこの「シャーローム」という言葉。だからやはり、ユダヤ人の挨拶は最高の挨拶です。「さようなら」なんて諦めない。さらば仕方がない、さようですならば仕方がありませんからお別れしよう。と。「さようなら」というのはそういうことだものね。ドイツ語のは、

「アウフビーダーゼーエン」「再会を期して、再び会うことを」

と、まだいい。けれども、「さようなら」は諦めの哲学だ。

こちらは、「平安」。平安というのは、まず神さまとあなたの魂の世界だよと。そこに本当の平安がありなさい。しからば、人と人との間の平和はきたる。平安が先ですよ。「平和問題、平和問題」なんて「平和」ばかりやっているから一向ダメだ。

私はこの秋、

「平和とは何ぞや」

というのを大学で講演するから、そのときに、平和をまずこの平安から説いてやろう。「平和、平和」なんて言ったって、ちっとも平和は来ない。平安をお前たちは知らないから。三派全学連なんて来るだろうから、話してやろうと思う。ああいうのはたくさん聴きにくるといっている。

聖霊の権威はもう恐いものはないです、正直。だから、皆さん、どうぞ、女の方でもひとつも恐いものはないですよ。

「平安、汝らにあれ」

と仰っているキリストが即ち、平安者なんだから。神さまとの本当の和らぎを持った、本当の平安を持った、安らかさを持った、そのキリストが言っているんですから、

「平安、汝らにあれ」

「そうです、あなたの霊をいただければ、必ず平安はきます」

「私はお前たちにこの霊を与える。そうしたら、必ず平安が来るぞ」

と。そうしたら、人の間がどうなつていましょうとも、大丈夫。

### ●驚嘆すべき霊体的存在

いいですか、「忍耐」というようなことを言うね。まあ仕方がない、もう少し忍耐しなくては仕方がないと。この世の中は、耐え忍ばなくてはならないことがたくさんあるよね。忍び。忍んでいる。しかし、その忍びも、やせ我慢して忍んだって忍びにならない。もう勝利しているんです、ちゃんと。勝利しているから、大丈夫、忍んで行けるんです。何も歯をくいしばらなくても、悔しがらなくてもいい。歯をくいしばったり、悔しがったら、その忍びは終にくたびれてしまうよ。

まあ、私の昔を知っていたら、驚くですよ、私を見たら。私は弱虫で臆病者で、





「どうして、あの小池があんなになったか」

というわけだね。それは私が自分で修養してこうなったのも何でもない。それは上からきたものです。上から。これは絶対恩寵の世界。これはキリストです。

もうとにかく、ものごとは福音書のキリストにぶつからなければ始まらない。このキリストにぶつかって、そこで降参して、その中に自分を投げかけて、キリストの中に自分を棄てるまでは。

「それはなかなかできません」

という。何もできないことはない。あるがままにその中に投げ込めばいい。キリストはちゃんと十字架でもって、

「さあ、お前はちゃんとここに棄てられてあるではないか。そして、お前はもうこ

こに私の復活の生命で生きているではないか。何を考えているのか」

と。何でもやっぱり順序があるのでね。いきなり、もの凄い祈禱会に入れると、

「ああ、あそこはあんな祈禱会をするから、もうよそう、よそう」

なんて、逃げて行ってしまう（笑）。私は今度は本当にそう思ったな。いろいろなことも何でも順序がある。だから、私も、

「まあしょうがないな、いつまでも観念信仰でしょうがないな」

と思うこともあるけれども、しかし、じつと忍び待っています（笑）。どうぞ、途中であきらめないようにしてください。

この場合には、本当に甦えりのキリストが聖霊を吹きかけたのだから、これはおそろしいことです。けれども、まだ彼らに祈りの本当の準備ができてないものだから、この時、さてどれだけ受けたかは知らんですよ。それで、

「お前たち、祈って待っている」

と。聖霊を受けとる一番大事な体勢は祈りである。いくら聖書をただ研究したって、ただ暗唱したって、ただ集会に出てきてみたって、それはダメです。祈らなくては、自分で、祈りとは、

「キリストの中へ己を投げ込む」

ことを祈りという。お願いではないよ。自分を本当に投げ込む。

そういう驚嘆すべき霊体的存在としてキリストは顕れた。お魚を食うことまでできた、このキリストは。しかし、お魚を食っても食わなくてもいいです。とにかく、もの凄い霊的な現実であって、我々の想像を絶するところの事態である。二千年前も、二千年経った今日も同じこと。

### ● 本当の批判精神

「主よ」とか言って祈っているね。一体、どういう主に祈っているんですか。活ける主に祈っ



ているんですよ。聖書に書いてあるからただ「主よ」なんて言っているのではない。それならば、牧師さんや神学者がなぜ、はつきりとこの活けるキリストを正直、受けとらないか。今のキリスト教の問題は結局、言われる答案が百点満点か90点かではないんだよね。事実、そこを呼吸しているか、そこを生きているかということだけです、問題は。

だから、私が内村鑑三のことを――内村先生をみんな無教会は無条件のように奉つてしまふ。「内村鑑三の信仰は」とか、今度の『興文』にも書いてある――私が前にちゃんと書いてあるのに、

「内村先生といえども使徒的信仰からはズレをきたしていた」と。そんなことを言うものだから、憎まれるんだ。

本当の批判精神――カントの哲学は「批判哲学」「クリテツシエ・フィロゾフィー」という――この「批判」という言葉を今の若い人はよく知らない。ただ批評だと思っている。そうではないよ、批判というのは。限りなく真理に即せんとして、私心なくしてものを言うことを批判という。自分が間違っていたら、いくらでも直ちに兜をぬぎます。我執をもつて言うのではないから、主観でものを言っているのではないから。人間は真理に対しては限りなく追究していく。

「私は真理である」

と言えたのはキリストだけです。ただ、聖霊をいただくと、その真理の権威は出てくるけれども、絶対に私はできません、権威は出てきても。

「我こそは」

なんて絶対に言えない。どこまでも真理の前には平伏しの魂です。そして、真理に即せんとして、物事をその角度から見、物事を判断していく。それが本当の批判精神です。そして、それをどこまでも真理に持つていこうとするわけです。相手をどうのこうのと、いわゆる感情をもつてものを言っているのではない。そういう批判精神が本当に理解されていないし、それを本当に持とうとしない。

大学の学生がもつとそういう意味において、はつきりとした批判精神を持つていい。マルクスでも何でも大いに読みなさい。そして、そのよきと限界をはつきり知りなさい。それだけです。何もケチケチすることはない。ところが、三派全学連みたいに、なにか捕らわれてしまつていて、ひとつの捕らわれたイズムになったら、これは批判精神でも何でもありません。とんでもない。そして、妙な暴力的になったら、もうこれはお終いですよ。ああ、もう小学校から大学に至るまで全く嘆かわしいですな、この教育の面を見るとね。これは私たち自身の責任でございますが。

だから、いいですか、さつきから言っている、福音第一でもって本当にものを見、それに対処していくのが本当の批判精神です。その本当の批判的精神とは建設的精神なんです。マイナスにしていく精神ではない。建設的精神です。破壊的精神ではないんです、本当の



批判精神は。建設的な精神です。

### ●信じて見よ

そして、このトマスなんて出てきて、さっき言ったようなわけですね。

<sup>24</sup> イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、<sup>25</sup> 他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅<sup>わき</sup>に差入るるにあらずば信ぜじ』

<sup>26</sup> 八日ののち弟子等<sup>たち</sup>また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じおきしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』<sup>27</sup> またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさし入れよ、信ぜぬ者とならで信する者となれ』<sup>28</sup> トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』

と、初めてこのへんで「わが主よ、わが神よ」と気がついたわけだ。気がついただけいいけれども。

<sup>29</sup> イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信する者は幸福<sup>さいわい</sup>なり』

「見ずして信する者は幸福なり」なんて、こんな言葉があるものだから、さあ今度は、無理やりに観念的に信じているような信仰がまたこれある。この言葉のまた真意をとりそこなってしまう。これをひっくり返すんです。

「信じて、見よ」

ということなんです、「見ずして信じよ」というのは。「見ずして信する者は幸福なり」とは、「信じてごらん。そうしたら、本当に見るぞ」

と。これが、

「見ずして信する者は幸福なり」

の底の意味は、私はそうだと思う。

「信じてかかれ、そうしたら、本当に見るものを見るぞ」

「信じて、見よ」と。まあ「信じてごらん」という言葉もあるね。そうじゃない。もつと端的な意味で、「信じよ、しからば、見るぞ」と。その点では本当に実証的です。見るものが見えてくるんだな。

「信ぜよ。しからば、見えるぞ」

と。「信ぜよ」とは「受けとれ」ということ。

「本当に受けとれ、しからば、聞こえるぞ」

と。「聞きて信ぜよ」という言葉もあるね。しかしながら、「聞く」ということと「信ずる」



ということが二段構えではダメなんですよ、二段構えでは。「聞く」ことが直ちに「信ずる」ことでなければダメです。「見る」ことが直ちに「信ずる」ことでなければ、本当の「見る」でもない。だから、信ずれば、もう見えてくるし、聞こえてくるし、ということですよ。この「信ずる」というのは「受けとる」ということ。「信ずる」とはどういうことかということの掘り下げは、また今度の鹿沢の集会でやりますから、まあちよつとこれは取つときにしておこう。

30 この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。  
31 されどこれらの事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

そういう意味においては、もうこの「信一切」なんです。ルターも言っているとおり、「信仰のみ」ということは、言葉の本当の意味では、

「信のみ」

なんです。そこから一切が出てくる。

それで、私たちが本当に、キリストの甦えりの生命というものは、さつきから申し上げているとおり、

「こういう現象があったから、キリストは甦えつたのではないか」

なんて言っていることではないと。私たち自身が本当に甦えりの人です。

### ●新しき生命を生きている

ドイツの詩人にノバールスというのがある。あの「ノバールス」というのは「ノイエス レーベン」「新しき生命」ということです。いい名前だね。我々はこの「ノバールス」「新しき生命」を本当に生きている。これはキリストの霊による。どんなに我々自身が相対的にはダメであつても、そんなことは問題にならないですよ。

「もう、死んでも死なないんです」

と、はつきり言えなくてはダメですよ。このキリストをいただいて、この甦えりのキリストの霊をいただいて、もはやなるほど、

「こういう現象があつたか、なかつたかということではなかつた」

と。最大の現象は、

「私自身がもう死んでも死なない生命をいただいている」

という、このことです。これが本当の甦えりのキリストの実証です。

「汝ら、証人となれ」  
あかしびと

ということ。

「もう私はどうであろうと、私の生命はキリストの生命ですから、これを奪うことはできませんよ」





と。

「この生命に共感してくれるようなひとでなければ結婚しませんよ」

くらいな、あなた方、女の人はそれくらいの勢いでいなければダメですよ。いい加減なことでもって説き伏せられてしまったらダメだよ(笑)。

「この私がわからない男はダメだ。どうして私がわからないか、何を見ているか。気の毒な青年どもだな」

くらいの乙女になっていただかないとね。また、男性も、その女性のそのよきが見えないで、二義的、三義的なことを詮議立てて、

「結婚しようか、しまいか」

なんて、ダメですよ。お互いに第一義でもって結ばれていかなければ。第一義で結ばれる。あとはどうでもいい。まず、そういう気合で行ってください。向こうが第二義くらいだったら、第一義にひっくり返す。まあ、そういう気合でひとつ行ってください。そうしたら大丈夫ですから。

「ああやつぱり、うちの娘はちがつてきた。これはいい加減なやつを世話するわけ

にいかなくなった」

と、お父さんお母さんが参ってしまうよな。

これが我々が、この甦えりのキリストを――なにも復活節でなくたって、私たちは毎回、もう最高のところですよ、この甦えりのキリストにでつくわして、そして、あとは使徒行伝の方へ移っていくだけのなしです。

自殺しかかったところの、ゲエテのあのファウストは、

「キリストは甦えり給えり」

という歌を聞いて、毒杯を飲むのをやめた。人間の生命を支配するものはこの生命だけです。この生命に触れるか触れないかだけです。

私みたいな人間を64歳だなんてね、そんな歳で量ろうとしたってダメですよ。もう年齢を私は超越してますからね。だから、60をマイナスして、4歳くらいだ(笑)。これは何と言ったって、このキリストの生命に触れてから、私は本当に自由になってしまったんだから仕方がない。おしまい。

